様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　5　月　1　日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：　2006　～　2008
課題番号：１８７９１７０５
研究課題名（和文）　母児分離を余儀なくされた母親への母乳育児支援のあり方に関する研究

研究課題名（英文）　The Study of breastfeeding supports to mothers in circumstances on a mother and baby separation.

研究代表者
三根　有紀子　（MINE　YUKIKO）
福岡県立大学・看護学部・客員研究員
研究者番号：３０３８２４３５

研究成果の概要：母児分離を余儀なくされた母親に対する入院中～退院までの母乳育児支援の課題を明らかにし、これらの母親への母乳育児支援のあり方を検討するための基礎データを得た。
すなわち、ケアの受け手（母親）と担い手（周産期にかかわる看護者）の双方に質問紙調査を行った。それと共に母児分離状態にある母親が使用できるリーフレットの作成を行い、研究対象施設にて試験的に使用した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	**900,000**	**0**	**900,000**
2007 年度	**800,000**	**0**	**800,000**
2008 年度	**800,000**	**240,000**	**1,040,000**
年度			
年度			
総　計	**2,500,000**	**240,000**	**2,740,000**

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：母乳育児支援・母児分離・Neonatal Intensive Care Unit(NICU)・周産期医療・助産学

１．研究開始当初の背景

母乳が新生児にとって最も優れた栄養源であるのは言うまでもないがそれは病的新生児や低出生体重児にとっても同様である(アメリカ小児科学会.2001)。このようにハイリスク新生児にとっての母乳の意義は特に栄養学意義や感染防御・免疫学的意義が強調されることが多いが、昨今では神経学的発達といった母乳の長期的利点も注目され始めている。

一方で Neonatal Intensive Care Unit(以下 NICU と記載)に入院を要するハイリスク新生児の母親は母児分離を余儀なくされるため、WHO/UNICEF が提唱する母乳育児成功のための 10 カ条を維持することは容易ではない。加えて母親が抱くわが子への自責の念や病状に対する不安などは計り知れず、機敏に動くスタッフや高度な機械が並ぶ NICU の中で無力感を感じることも少なくない。また、これらの母親への NICU 退院後の母乳育児の継続支援も充分に行われているとはいえない状況である。

母乳育児を行うことができるのは母親のみであるが、このような環境に置かれた母親

にとって母乳育児の継続は困難を極める。また、あらゆる状況下に置かれた母子の母乳育児支援は助産師の重要な役割の一つと考えるが、母児分離を余儀なくされた母親が母乳育児を継続するためのサポート体制はまだ充分ではない。

米国では米国小児科学会が強力に母乳育児を推進しており、母親への母乳育児のガイドブック[1)]の発行、また母親達のボランティアグループであるラ・レーチェ・リーグ・インターナショナルでは低出生体重児を出生した母親へのリーフレット[2)]の配布が行われている。しかしながら、ハイリスク新生児を出産した母親の入院中から退院後の母乳育児支援の在り方に関する研究は、入院した施設の医療者の実践報告が主であり、系統的な国内研究は少ない。

【文献】

1)米国小児科学会編．母乳育児のすべて－お母さんになるあなたへ－．大阪，メディカ出版，2005.

2)Gwen Gotsch . Breastfeeding Your Premature Baby . La Leche League International Inc., 1999.

２．研究の目的

本研究の目的は、母児分離を余儀なくされた母親に対する入院中～退院までの母乳育児支援の課題を明らかにし、これらの母親への母乳育児支援の在り方を検討するための基礎データを得ることである。そのためにケアの受け手とケアの担い手の双方から以下のデータを収集し、分析を行う。

(1)母児分離の状況にある母親を取り巻く医療者(看護者)が入院中～退院後に行っている具体的なサポート

(2)母児分離を余儀なくされた母親が入院中～退院後に受けた具体的なサポート

(3)母児分離を余儀なくされた母親が医療者に望む母乳育児支援内容

３．研究の方法

【質問紙調査 1】目的(1)に対する調査

(1)対　象

F県内の施設基準を満たしたNICUの看護職員とそれら NICU を有する病院の産科病棟看護職員

(2)時　期

2007 年 3 月

(3)方　法

郵送による自記式質問紙調査

(4)質問紙の内容

回答者の属性、「母乳育児成功のための 10 カ条」に基づき、「10 カ条」に対する意識とその実践に関する項目から構成した。

(5)倫理的配慮

対象施設の看護部長（あるいは総看護師長）に調査の同意を得たのちに、施設へ質問紙を郵送した。対象者の質問紙の返送をもって研究参加の同意を得た。

【質問紙調査 2】目的(2)(3)に対する調査

(1)対　象

F 県内の施設基準を満たした NICU(1 施設)に児が入院した経験を持つ母親(28 名)

(2)時　期

2008 年 8 月～2009 年 3 月

(3)方　法

郵送による自記式質問紙調査

(4)質問紙の内容

回答者の属性、「母乳育児成功のための 10 カ条」に基づき、母親が受けたケアに関する項目と自由記述から構成した。

(5)倫理的配慮

対象施設に調査の同意を得たのちに、対象施設にて質問紙を配布した。対象者の質問紙の返送をもって研究参加の同意を得た。

４．研究成果

【質問紙調査 1】

(1)回収率

産科	NICU
67 名(64.4%)	123 名(78.8%)

(2)回答者の属性

		産科(%)	NICU
年齢		33.67　歳 (SD 8.46)	30.05　歳 (SD 6.50)
職種	助産師	47	12
	看護師	18	109
	准看護師	1	0
	保育士	1	0
	無記入	0	2
経験年数	卒後臨床経験年数	11.04　年 (SD 7.92)	8.07 年 (SD 6.40)
	産科経験年数	7.67 年 (SD 7.23)	19 名 2.76 年 (SD 1.92)
	NICU 経験年数	17 名 2.77 年 (SD 3.06)	4.64 年 (SD 3.56)

(3)「母乳育児成功のための 10 カ条」に対する認識と看護実践

①「10 か条」の認知

「内容を知っている」者は産科 49 名(73.1%)、NICU32 名(26.0%)で産科スタッフの方が多い傾向にあった。NICU 看護スタッフの 27 名(22.0%)は「10 カ条」を知らなかった。

②「10 カ条」の項目ごとに対する認識

第 6 条(6.医学的に必要でないかぎり、新生児には母乳以外の栄養や水分を与えないようにする)、第 7 条(7.母子同室にする。母親

と赤ちゃんが終日一緒にいられるようにする)、第 9 条(9.母乳で育てている赤ちゃんにゴムの乳首やおしゃぶりを与えない)は、それ以外の項目に比して、重要性の認識が低い傾向があった。

第 5 条(5.母乳の飲ませ方をその場で具体的に指導する。また、もし赤ちゃんを母親から離して収容しなければならない場合にも、母親に母乳の分泌を維持する方法を教える。)が《とても重要であると思う》者は産科、NICU 共に 60%を超えた。

③「10 カ条」に基づく看護実践

母児分離状態にある母親へ「搾乳を勧めている」者は NICU93 名(75.6%)、産科 55 名(82.1%)であったが、「分泌維持の方法を教えている」のは NICU60 名(48.8%)、産科 49 名(73.1%)であった。分泌維持方法の具体的方法となる「搾乳頻度、搾乳時間、搾乳量などを具体的に伝える」「搾乳の仕方(手技)を具体的に教える」という項目も、同様の傾向があった。

「NICU で直接母乳の観察、介助を行っている」者は NICU118 名(95.9%)でほとんど者が行っていた。しかしながら、その介助を自信もって行っているものは NICU23 名(19.5%)にとどまった。

（4）考察

①母児分離状態を余儀なくされる環境にある NICU の看護スタッフへの「10 カ条」の認知はまだ不十分であることが示唆された。

② 第 6 条(6.医学的に必要でないかぎり、新生児には母乳以外の栄養や水分を与えないようにする)、第 7 条(7.母子同室にする。母親と赤ちゃんが終日一緒にいられるようにする)、第 9 条(9.母乳で育てている赤ちゃんにゴムの乳首やおしゃぶりを与えない)はそれ以外の項目に比して、重要性の認識が低い傾向があり、臨床においても実施が不十分である可能性がある。

③母児分離状態にある母親への支援として、第 5 条(母乳分泌維持の方法を教える)に対する重要性の認識はあるが、その実践が不十分であることが示唆された。

【質問紙調査 2】

(1)回収率

28 名(27.8%)

(2)児の平均月齢と児のNICU平均入院日数

平均月齢　　5.5か月(SD4.6)

NICU平均入院日数　40.3日(SD36.4)

(3)妊娠中・産後・児が NICU 入院中に、「産科外来・産科病棟・NICU 看護スタッフ」から受けたケア

「母乳育児を行う上で一番役に立ったこと」は《入院していた施設の方針や入院していた施設のスタッフから習ったこと》が最も多く15名(55.6%)であった。

「児がNICU入院中“子どもの状態に合わせて母乳育児を続けるために何を行えばよいのか”」について《その都度説明を受けた》と回答した者は20名(71.4%)であり、《その都度説明を受けていない》《わからない》と回答した者はそれぞれ4名(14.3%)であった。「NICU内で看護スタッフに実際に乳房や乳首を見てもらいたい(お乳や飲ませ方を見てほしい)」と《思ったことがある》と回答した者は10名(35.7%)であった。

母乳育児に関してスタッフに自分の気持ちを尊重してもらい、精神的にサポートしてもらえたと《感じている》者は19(67.8%)であった。

(4)母親が医療者から受けたケアで「満足・うれしかったケア」22 名、「不満足・困ったケア」9 名の自由記述の分析

「満足・うれしかったケア」は 36 の単位が抽出され、それを内容により分析した結果、3 つのカテゴリーが得られた。すなわち『母親に対するあたたかいサポート』(n=12;54.5%) 『乳房ケア、授乳と搾乳の支援』(n=12;54.5%)『わかりやすい説明』(n=5;22.7%)である。「不満足・困ったケア」は 9 単位が抽出され、『統一されていないケアや教育』(n=4;44.4%)『スタッフの言葉や人柄』(n=2;22.2%) 『搾母乳に関すること』(n=2;22.2%)であった。

(5)考察

①母児分離状態にある母親への母乳育児継続には入院していた施設の方針やスタッフから教育を受けたことが影響を与えることが示唆された。

②母親は、母乳育児継続のための方法を教えてもらうだけでなく、実際に NICU 内で乳房や乳首、飲ませ方を見てほしいと感じていることがわかった。それと共に精神的にサポートしてもらったと感じているものが少ないことが明らかになった。

③母児分離状態にある母親が母乳育児支援として医療者に望むケアは母親への乳房ケア、授乳や搾乳の支援と共にあたたかいサポートであることが明らかになった。

【質問紙調査 1】【質問紙調査 2】の結果を受けて、母児分離状態にある母親向けの母乳育児支援のリーフレットを作成した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　１件）
①三根有紀子、山本武志、佐藤香代、産科, NICU 看護職員の「母乳育児を成功させるための 10 カ条」に対する認識とケアの実際、第 48 回母性衛生学会学術集会、2007 年 10 月、つくば

６．研究組織
(1)研究代表者
三根　有紀子（MINE　YUKIKO）
福岡県立大学・看護学部・客員研究員
研究者番号：30382435

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：